

中国短信

経済動向

生産・消費は横這い、投資は再加速 1

工業生産は伸び率横這い、固定資産投資は再加速傾向
輸出拡大は続くが、消費は横這い、消費者物価も弱含み

特集

中国の野菜事情 3

野菜市場の現状 - 消費者ニーズの多様化、栽培技術の進歩
野菜の輸出の状況 - 輸出型農業の主役、最大の輸出先は日本
野菜産業の今後の方向性：産地特性、品質標準化、加工、産業化、輸出志向
中国の野菜の種類と市場価格の一例

最近の話題

対中直接投資の回顧と展望 11

2005年の対中投資を回顧する - 独資化、大型化
2006年の外資投資を展望する - サービス分野、M & A、体制再編
投資環境の改善に向けた政策措置 - 内外企業の税制統一、独占禁止法整備

東北振興

遼寧省の重点300プロジェクト 13

300プロジェクトの概要 - 製造業（設備、素材）、ハイテク、インフラ
300プロジェクトの背景 - 設備製造業と素材産業がけん引する産業高度化

2005年12月

株式会社 旭リサーチセンター
遼寧中旭智業有限公司

1. 経済動向：生産・消費は横這い、投資は再加速

工業生産は伸び率横這い、固定資産投資は再加速傾向

中国経済は工業生産が落ち着いた推移を示す一方、固定資産投資には再加速の兆しもうかがえる。総じて、安定的な高成長が続いている。

主要経済指標の推移

(単位：前年比、%)

	全国		遼寧省	
	2005.1～10	2005.1～9	2005.1～10	2005.1～9
工業生産	16.3	16.3	20.2	20.5
固定資産投資	27.6	26.1	45.5	44.1
輸出入総額	24.0	23.7	25.4	28.7
輸出総額	31.1	31.3	32.8	37.3
輸入総額	16.7	16.0	16.8	19.0
海外直接投資	2.1	2.1	84.4	58.6
都市住民所得	11.5	9.8	13.7	12.6
小売売上高	13.0	13.0	13.3	13.2
消費者物価	1.9	2.0	1.5	1.5

工業生産は1～10月も前年比16.3%増となり、ここ4ヵ月間、伸び率は変わらない。主な業種別にみると、化学原料・化学製品が17%増、鉄鋼精錬圧延加工が19.1%増、非鉄金属製品が18.8%増と重化学工業分野は堅調に推移している。また、電気機械・器材が17.3%増、通信設備・コンピュータ・電子設備が22.5%増と高い伸びを続ける一方、石油・天然ガスは5.1%増、交通運輸設備は9.4%増、電力・熱力は8.7%増と需給が逼迫している分野での生産が伸び悩んでいる。

固定資産投資は、1～10月は前年比27.6%増となり、年初の24.5%増からこのところ再加速の傾向がみられる。不動産投資は年初の27.0%増から21.6%増まで鈍化しており、中央政府認可プロジェクトも15.5%増と抑制気味であるが、地方政府プロジェクトは29.3%増と依然、高い水準で推移している。産業別には農業など第一次産業は20.7%増、製造業など第二次産業は35.9%増、サービス業など第三次産業は22.3%増となっている。

輸出拡大は続くが、消費は横這い、消費者物価も弱含み

輸出入は1～10月の総額で1兆1,486.1億ドル、前年比24%増となっている。輸出は31.1%増の6,144.9億ドル、輸入は16.7%増の5,341.2億ドルで、貿易黒字は前年比626.7%増の803.7億ドルに膨らんでいる。一方、海外からの直接投資は、契約額は22.5%増と回復しているが、実行額は2.1%と6ヵ月連続のマイナスとなっている。直接投資の上位10ヵ国・地域は香港、英領ヴァージン諸島、日本、韓国、米国、シンガポール、台湾、ケイマン諸島、ドイツ、サモアでこれら10ヵ国・地域で実行額の84.7%を占めている。

1～10月の小売売上高は前年比13%増となり、ここ3ヵ月伸び率は横這いとなっている。都市・農村別にも、都市部が13.6%増、農村部が11.2%増で、いずれも大きな変化はない。主な商品別では、現在の消費ブームの主役である自動車が26.7%増、通信機器が26.9%増、建築内装材が20.8%増と伸びているほか、スポーツ娯楽用品が16.9%増、家電・音響機器が23.7%増、化粧品が15.2%増と消費の高度化もうかがわれる。また、原油高騰もあり石油製品類が34.8%増となる一方、鳥インフルエンザの影響か、家禽肉卵類は6.4%増にとどまっている。

消費者物価上昇率は1～10月で前年比1.9%となったが、10月単月では1.2%で9月(単月0.9%)よりも上昇し、低下傾向に歯止めがかかった格好になっている。都市・農村別には都市部1.2%、農村部1.3%となっている。サービスの価格は3.1%と比較的高いが、消費財は0.7%で、特に食糧価格(0.8%)、油脂価格(8.0%)、家禽肉製品(4.9%)、生鮮卵(2.3%)の下落が目立っている(水産物は4.4%、野菜は17.5%と上昇している)。

2. 特集：中国の野菜事情

野菜市場の現状 - 消費者ニーズの多様化、栽培技術の進歩

国家統計局によると、2004年の野菜の生産量は前年比1.7%増の5億4,927万トンで、一人一日あたりの消費量は全国平均で約1kgである。このような巨大な消費市場を背景に、農業分野では野菜生産は成長分野として注目されている。生活水準の向上とともに、野菜消費ニーズも変化しており、野菜の生産などにも新しい傾向をもたらしている。

各国の一人一年当たり野菜供給量（2002年） 単位：kg

世界平均	日本	中国	韓国	米国	ドイツ	フランス	イタリア
114.1	106.5	254.1	209.2	127.7	90.6	137.8	151.0

（資料）FAO (Food and Agriculture Organization of the United States) 「Food Balance Sheet」

消費者の野菜へのニーズは多様化している。野菜の種類が増加するなか、優良品質志向、栄養志向をベースに、自然回帰志向の消費者も少なくない。天然野生素材へのニーズも高まっており、健康志向がブームになっている。旬ではない野菜を求める人も増え、珍しい形や色の野菜も話題を呼んでいるし、洗浄加工野菜も徐々に浸透しつつある。野菜栽培には環境配慮が必須のものとなりつつある。消費者のニーズが自然志向や、農薬汚染のないグリーン野菜に向かいつつある。それにともなって野菜生産の現場でも、バイオ農薬や低残留性の農薬の使用、毒性の高い農薬の使用禁止、化学肥料から有機肥料へ、といった傾向が明らかになりつつある。農薬汚染を低減して、野菜の品質を高め、国内外の市場ニーズに対応することが、最近の傾向となっている。

栽培技術の面では、全国各地で通年栽培、無土水面栽培、集約化栽培、スプリンクラー・散水技術などが普及しつつある。このような技術によって、野菜生産に季節の制約がなくなり、市場に流通する品種も豊富になってきている。人々の生活テンポが早まるなか、加工野菜も便利なものとして浸透しつつある。加工野菜は産地で消毒・滅菌、等級分け、小分け包装したもので、急速冷凍、真空保存で輸送、在庫に便利で、輸出しても付加価値が高く、海外での市場可能性が広がっている。

野菜の輸出の状況 - 輸出型農業の主役、最大の輸出先は日本

野菜の生産は技術集約、労働集約型であり、中国の輸出型農業の主役となっている。2005年上半期の野菜（生鮮野菜、加工野菜、乾燥野菜）の輸出は、前年比21.7%増の320.7万トンで、輸出額は前年比21.7%増の20.6億ドルへと拡大している。輸出のうち、生鮮野菜は182.1万トン、加工野菜は121.5万トン、乾燥野菜は17.1万トンで、主なものはニンニク、唐辛子、レンコン、ショウガ、大根である。

2005年1～6月の野菜輸出数量・金額

	総量			
	生鮮野菜	加工野菜	乾燥野菜	
重量（万トン）	320.7	182.1	121.5	17.1
金額（億ドル）	20.6	7.8	8.4	4.4

輸出の多い地域は山東、福建、浙江、新疆、広東で、このうち山東省の主な輸出先は日本と韓国である。両国市場の根強い需要に支えられ、山東省の輸出は高い伸びを続けており、野菜輸出大省のトップに立っている。一方、福建省の輸出先は香港、台湾や東南アジアになっており、新疆はロシアや中央アジア向けで伸びている。これら5省のほか、伸びが高いのは内蒙古（105.9%増）、河南（100.4%増）、江西（57.3%増）、吉林（55.7%増）だが、一方で貴州（35.3%減）、チベット（20.2%減）、青海（10.7%減）はマイナス成長となっている。

2005年1～6月の野菜輸出5大省

	山東	福建	浙江	新疆	広東
金額（億ドル）	6.5	4.1	1.5	1.4	1.2
前年比（%）	24.5	18.0	8.9	105.8	1.1

輸出先をみると日本が最大だが、米国、韓国、マレーシアへの野菜輸出も伸びてきている。日本への輸出は、生鮮野菜ではニンニク、タマネギ、ネギ、ショウガ、大根、ニンジン、じゃがいもで、ほかに野菜の漬物がある。アセアン諸国向けも伸びており、そのうちマレーシア（アセアン内シェア42.6%）、インドネシア（同26.3%）が大口だが、2003年10月の中国・タイFTA締結以降、ニンニクやニンジンなど、タイへの輸出も拡大している。タイから中国への輸入も増えているが、ほとんどはキャッサバででんぷん製造に使われる。

2005年1～6月の主要輸出先国・地域

	総量 (万トン)	前年比 (%)	金額 (億ドル)	前年比 (%)
日本	86.2	21.0	7.8	14.2
米国	17.0	1.6	1.7	7.4
韓国	27.3	34.1	1.3	17.0
アセアン	55.3	19.1	2.5	25.0
マレーシア	22.5	25.4	1.1	39.1
インドネシア			0.6	26.2
タイ			0.3	6.5
香港	24.7	9.9	0.9	10.6

野菜産業の今後の方向性：産地特性、品質標準化、加工、産業化、輸出志向

(1)産地の特性を生かした生産体制の確立

過去 20 余年の取り組みによって、野菜栽培総面積や生産量、一人当たり消費量はかなり高い水準へと発展してきた。野菜産業は低レベルでやみ雲に拡大を志向した時代から、品質への要求が強まるなか、産地の農業資源や基礎インフラ、適した野菜の品種、経済や科学技術の発展レベル等の条件に適した生産体制を構築する時代を迎えつつある。

たとえば、海南の亜熱帯気候の下では通年栽培、日照時間の長い西北や東北では冬の温室栽培、沿海部という地理的条件を生かして山東や江蘇、浙江、広東では輸出型生産基地、高所得の北京、上海、広州などの大都市では加工野菜基地など、特色を生かした産地が構築されていこう。中国全体の野菜生産は成長鈍化がみられるかもしれないが、それでも高成長する地域が現れてこよう。

(2)品質の標準化

環境に配慮、製品の品質、外観など生活水準の向上にともない、消費者のニーズも高度化しており、それらはまた、野菜の海外輸出戦略の前提条件にもなっている。現在、政府は野菜製品の品質標準、技術規定などの制定、認定許可制度、市場進出許可制度などの導入に着手している。それらは農薬残留量や衛生指標などにとどまらず、産地の環境、栽培管理方法、関係者の安全管理、包装の規格、

商標登記など野菜生産の多方面にわたる。このような標準や技術体系を世界的な水準に引き上げることは、特に中国野菜の輸入国の要求にも応えることになる。

(3)加工の度合いを深める

初期加工として野菜を等級分けし、洗浄、包装、冷却することで、野菜の腐乱防止や都市ゴミ低減につなげるとともに、消費者の利便性を向上させる。現在、大中型都市のスーパーマーケットでは包装された野菜が出回っているが、郊外や農村部では何も処理、加工されていない野菜がそのまま売られており、買って帰っても翌日には駄目になってしまうのが現状である。

野菜の加工は中国農業の弱点の一つで、野菜産業全体の発展や収益性向上の足を引っ張っている。もっとも先の五ヵ年計画期（2001～05年）にかなり技術開発が進んでいるので、今後、その成果が現れてくるかもしれない。

(4)産業化のレベルを上げる

野菜生産の産業化のためには、小規模生産、関連事業分野の開拓といった、野菜産業の抱える2大課題の解決が必要となる。

現在、中国の野菜生産者の95%はただ栽培するだけで、資金、技術、知識、管理能力を備えて関連分野に事業を広げたり、大規模な市場を開拓したりできない。どのように産地の農家を組織化するか、どのように産地から野菜を集約してくるか、どのようにグローバルな市場の需給情報を入手し、的確に生産・配送するか、といった問題がうまく解決できれば、サービス、品質、そして収益も向上していく。野菜生産をいかに産業として確立していくかが課題である。

(5)輸出志向

中国の優位性を生かし野菜の輸出を発展させることは、グローバル経済下では必然ともいえる。中国は野菜生産の長い歴史と経験、多くの品種を持つとともに多様な気候条件が存在することで、他国・地域では生産できない野菜や、他国・地域では旬でない野菜を、多くの周辺国・地域に向けて、低廉な労働力を生かして提供できる。国内の野菜消費量が飽和するか、貿易バランスはどうか等の条件にもよるが、中国の野菜産業が輸出志向を強めていくことは間違いない。

中国の野菜の種類と市場価格の一例

- (1)白菜類：大白菜（中国北方の主要な野菜）、小白菜（チンゲンサイ、パクチョイなど含む中国中・南部の野菜）、菜薹（野菜の茎、薹。中国特産で長江流域に分布し、湖北省武昌と四川省成都が最も有名。栄養豊富で、ビタミンCはハクサイ、ツケナ類などより高い。薹の食用方法は多く、炒めたり、油で揚げたり、湯に通して和え物にするなど）
- (2)キャベツ類：甘藍（キャベツ）、花菜（カリフラワー、俗に「菜花」とも）、青花菜、芥藍（カラシナ）。



大白菜



甘藍



花菜

- (3)根菜類：萝卜（ダイコン）、胡萝卜（ニンジン）、根芥菜（根のカラシナ）。
- (4)茄果類：番茄（トマト）、辣椒（唐辛子）、茄子（ナス）。



胡萝卜



番茄



茄子

- (5)ウリ類：黄瓜（キュウリ）、冬瓜（トウガン）、丝瓜（ヘチマ）、苦瓜（ニガウリ）、南瓜（カボチャ）、西葫芦（ペポカボチャ、カボチャの一種でギョーザのあんに使う）、佛手瓜（仏手ウリ、メキシコや西インド諸島が原産地で、雲南、福建などで栽培。最近、北方地域でも栽培に成功。ビタミンや鉍物質が豊富で報道によると、高血圧、不妊症、特に男性の性機能衰退に対して効果がある）。



黄瓜



南瓜

(6)豆類：菜豆（インゲンマメ。「芸豆」「四季豆」、地方によっては「扁豆」とも）、
豇豆（ササゲ）、豌豆（エンドウ）、菜用大豆（料理用ダイズ）。

(7)葱ニンニク類：大葱（ネギ）、圆葱（玉ネギ）、大蒜（ニンニク）、韭菜（ニラ）。



大葱



圆葱

(8)葉野菜類：菠菜（ホウレンソウ）、莴苣（レタス）、芹菜（キンサイ、セロリに
似たせり科の植物）、油菜（チンゲンサイ、アブラナ科の野菜）。

(9)イモ類：马铃薯（ジャガイモ）、生姜（ショウガ）、山药（ヤマイモ）、芋（サ
トイモ）。



菠菜



芹菜



马铃薯

(10)水生野菜：茭白（マコモダケ。中国野菜の一種、煮物や炒め物などに広く用
いる。中国とベトナムで栽培され、中国では東北から華南まで広く栽培され、
太湖流域で多く、無錫、蘇州、杭州産がブランドになっている。炭水化物、蛋
白質、脂肪などが豊富）、荸荠（クログワイ。地方によっては「地梨」ともいう。

クワイに似た大粒のカヤツリグサ科の水生野菜で、皮以外は生食もする。蓮藕（レンコン）、菱（ヒシ。通常は「菱角」という。果実を生か、ゆでて食べる。旬は秋で、蛋白質、脂肪、炭水化物、ビタミンやカルシウム、磷、鉄など多種の栄養物質、多種のアミノ酸を含み、薬膳にも使われる）、水芹（セリ。原産地は東南アジア。茎の下部はさくさくして柔らかく、茎は白い。葉は香があり、水分は多く、白くて柔らかい茎、葉を食用にして、油で炒めたりする。多種のビタミンと無機塩、カルシウム、磷、鉄を含み、血をきれいにして、血圧を下げる効果がある）。

- (11)海外から導入された野菜：櫻桃番茄（プチトマト）、櫻桃萝卜（プチダイコン）、羽衣甘藍（ケール、葉キャベツ、羽衣カンラン。原産地は地中海からアジアまで、イギリス、オランダ、ドイツ、米国での栽培が多い。中国では10数年程度の歴史しかなく、北京、上海、広州などの大都市で食される）、抱子甘藍（抱子カンラン、羽衣カンランと共にカンランの一種。原産地は地中海沿岸で、台湾で少量を栽培。蛋白質、ビタミンCが豊富。）、球茎茴香（Florence Fennel、イタリアウイキョウ。原産地はイタリア南部で、主に地中海沿岸に分布。最近、中国の大中型都市や沿海都市の国際的なホテルや大規模スーパーマーケットに登場。調味料を入れて冷たいまま和えて食する、各種肉類と炒めて食する）。
- (12)人工栽培山野菜：馬齒莧（スベリヒユ。漢方薬としてよく使う。消炎・散血・利尿剤に用い、食用も可）、芥菜（ナズナ。食用のほか、利尿・解熱・止血剤に用いる）、蒲公英（タンポポ）、苦苣菜（中国の野生植物で、広東、広西、雲南、四川、湖南、江蘇、浙江、湖北、江西、安徽などで広範囲に栽培される。最近北京、河北、東北各省でも試験栽培に成功。栄養豊富な飼料で、ブタ、牛、鳥、ウサギ、魚などの飼料として有効）、菊花腦（キクの花。漢方薬として風邪による頭痛に用い、食用も可）、馬蘭（コヨナメ）、桔梗（キキョウ）。



櫻桃番茄



馬齒莧

< 参考 > 遼寧省瀋陽市での野菜の値段 (12月17日調べ)

単位：元 / 500g (現在、1元 15円)

	産地	瀋陽華聯超市 (スーパーマーケット)	瀋陽北行市場 (一般市場)
西红柿(トマト)	山東省	2.40	2.00
黄瓜(キュウリ)	山東省	1.80	2.00
苦瓜(ニガウリ)	山東省	5.80	4.00
冬瓜(トウガン)	河北省	1.25	0.70
南瓜(カボチャ)	湖北省	1.68	1.00
茄子(ナス)	山東省	1.68	2.50
土豆(ジャガイモ)	黒龍江	0.99	1.00
芸豆(インゲン)	山東省	2.90	3.00
芹菜(キンサイ)	遼寧省	1.38	1.00
白菜(ハクサイ)	遼寧省	0.88	0.70
小白菜(小ハクサイ)	遼寧省	1.90	1.50
卷心菜(キャベツ)	山東省	1.90	1.50
韭菜(ニラ)	山東省	2.40	1.70
青椒(ピーマン)	山東省	3.20	2.50
圆葱(タマネギ)	遼寧省	0.85	1.00
大葱(ネギ)	遼寧省	1.75	1.50
大蒜(ニンニク)	遼寧省	2.80	3.00
蒜薹(ニンニクの芽)	安徽省	4.90	3.50
油菜(チンゲンサイ)	山東省	1.80	1.50
菜花(ハナヤサイ)	山東省	2.80	2.50
菠菜(ホウレンソウ)	河北省	2.90	2.00
茼蒿(シュンギク)	河北省	2.40	1.50
大萝卜(ダイコン)	遼寧省	1.70	1.50
胡萝卜(ニンジン)	遼寧省	0.80	1.00
蘑菇(キノコ)	遼寧省	2.90	3.00
豇豆(ササゲ)	遼寧省	5.60	4.00
姜(ショウガ)	遼寧省	2.80	2.50

(注) 瀋陽華聯超市と瀋陽北行市場の野菜の仕入れ先は同じで、瀋陽市野菜卸売市場から入荷しており、野菜の産地は同じである。

3. 最近の話題：対中直接投資の回顧と展望

2005年、中国への海外直接投資（実行額）は1～10月で2.1%とWTO加盟以来、初めての減少局面を迎えている。短期的な影響は限定的で、2006年には再びプラス軌道に復するとみられるが、投資環境や市場の競争状況によっては波乱含みかもしれない。もし、マイナス局面が長期化すれば、中国经济への悪影響は避けられない。

2005年の対中投資を回顧する - 独資化、大型化

2005年の外資の対中投資には、いくつかの特徴が認められる。

- ・ 契約額は増勢を維持しているが、実行額は減少している。
- ・ 合併、合作形態での投資が減り、独資形態のウエイトが高まっている。
- ・ EUや日本からの投資は伸びているが、米国からの投資が減少している。
- ・ 西部地区への投資も増えてはいるが、東部地区のシェアが依然9割を超える。
- ・ 製造業以上にサービス業で鈍化幅が大きく、ハイテク分野でも減速している。
- ・ 平均投資規模は大型化しており、大型M&Aも相次いでいる。

マクロ調整策で引き締め気味の経済運営にとって、外資の対中投資鈍化は好都合ではあった。また、外資による輸出拡大や輸出構造の高度化によって、中国经济は恩恵を受けている。

しかし、外資の投資エリアや投資分野には偏りがみられ、特に西部地区への投資は極めて少ないことは、地域的に均衡の取れた発展にとっては好ましいこととはいえない。また、外資企業の輸出拡大が、貿易黒字と外貨準備の急膨張を招いている面もある。さらに、「独資化」「大型化」が進むと、外資による市場の独占への懸念が、ますます強まってくる。

2006年の外資投資を展望する - サービス分野、M&A、体制再編

直接投資の契約額からみると、2006年の対中投資実行額は5～10%程度の増加基調に戻るとみられる。また、以下のような傾向が見込まれる。

独資化が進む：独資形態の比率は対中投資全体の75%程度まで上昇しよう。

サービス業の伸びが製造業を上回る：金融、保険、運輸、電力・水道・ガス、

流通が、その有望分野である。

国・地域別にはアセアン、韓国、EUからのシェアが上昇し、日本からは鈍化が見込まれる。

東部や中部地区への投資(実行額)は回復するが、西部地区では減少に転じる。

M & A方式が増える：東部地区では土地資源節約の観点から。東北老工業基地等では国有企業の戦略的再編のために。

投資の平均規模は引き続き上昇し、大型のプロジェクトが増える。

有力多国籍企業は中国国内の企業体制再編に取り組んでおり、マネジメント、コントロールの集中を図る地区総本部型企業が増える。

現地市場に対応した研究開発のためにR & Dセンター投資などが増える。

大型M & Aは金融・保険、流通分野のほか、高級消費財、自動車、素材、機械等で盛んになる。

投資環境の改善に向けた政策措置 - 内外企業の税制統一、独占禁止法整備

- (1)中国経済の安定的な高成長が対中投資の吸引力の第一であり、安定的なマクロ経済運営が何より重要である。
- (2)経済主体の多様化、市場経済体制の整備の観点からすれば、国内企業と外資企業の税制統一は必然である。しかし、外資企業の投資活動に波乱をきたさないためには、段階的な乗り移りが求められる。
- (3)土地管理を厳格に運用することで、外資の対中投資を、比較的規制の緩やかな中西部地区に誘導し、地域間の均衡の取れた発展を目指す。
- (4)知財権保護の問題が、対中投資における最重要課題としてクローズアップされてきており、外資の中国への技術移転を妨げる要因にもなっている。知財権の侵害に対する取締りを強化する。
- (5)対中投資の独資化、大型化にともない、外資による市場独占への懸念が強まっている。独占禁止法等の制定を急ぎ、競争政策や市場監督管理体制を整備することで、秩序ある市場競争環境を実現する。

4．東北振興：遼寧省の重点 300 プロジェクト

300 プロジェクトの概要 - 製造業（設備、素材）、ハイテク、インフラ

2005 年、東北老工業基地振興計画に基づき、遼寧省発展改革委員会は 2 大基地建設、3 大産業発展の目標を掲げ、重点的に推進する 300 プロジェクトを選定した。資源や技術の優位性を生かし、省経済のエンジンとして産業構造調整を進めることが期待されている。

- (1) 製造業 100 プロジェクト：設備製造業が 43 件、素材産業が 43 件、繊維・農産品加工が 14 件で、総投資額は 1,678 億元である。
- (2) ハイテク 100 プロジェクト：市場が有望で、高付加価値が見込め、知財権を持ったハイテク事業化プロジェクトで、総投資額は 83.7 億元である。
- (3) インフラ 100 プロジェクト：交通インフラ 38 件、水利関係 13 件、エネルギー 28 件などで、総投資額は 627 億元である。

300 プロジェクトの背景 - 設備製造業と素材産業がけん引する産業高度化

300 プロジェクトが目指すのは、設備製造業と素材産業の 2 大基地建設による産業構造の高度化である。

- (1) 優位性ある産業の発展加速：1～8 月の遼寧省の工業生産は 20.7% 増で、全国平均を上回っている。高付加価値鋼材、石油化学工業や新型建材などの素材・部品産業は 20.2% 増、各種設備製造業は 22.6% で省経済の二大エンジンである。
- (2) 企業の技術革新（革新）を促す：製造業の技術革新型投資は 50.5% 増となっており、省内大手企業の技術センターは 136 ヲ所に達する。新製品開発も 8.9% 増の 7,016 件で、世界レベルの技術や知財権を持つ技術開発も相次いでいる。
- (3) 産業構造や技術水準の高度化：既存産業の情報化を促進し、情報化と工業化の同時進行を図る。CAD、CAM 等の導入企業比率は 78%、プロセス管理技術は 58%、財務、営業、調達等の個別情報システム導入は 92%、ERP (Enterprise Resource Planning：企業資源計画) も 15% と広がっている。

プロジェクト推進により産業のリンケージを強化し、関連産業の同時発展を目指す。たとえば、三峡ダムで取り入れられた鞍山鋼鉄の水力発電機タービン鋼板は、日米の関係者からも評価された一つの成果といえる。